合気道小話「合気神社」

群馬杉武館代表　杉本　久

風薫る五月の連休に、中古の５０ｃｃのバイクを物置から引っ張り出して、旅に出たことがある。どこというあても無かったので、とにかく海の見えるところへ行こうと思った。海といっても自宅は群馬の海ナシ県だから、日本海へ出るのも太平洋に出るのも大差ない。
けれどナナハンみたいなカッコよいバイクなら、何処へ出ても恥ずかしくないし、高速道路もぶっ飛ばせるが、ゼロハンではそうもいかない。
結局、平地を行ける太平洋の茨城県大洗海岸を目指した。

国道５０号線に沿って、栃木県から茨城県へと向かうのだが、ゴールデン・ウイークのため道路はぎっしりと混んでいた。時々県道や田舎道にもぐり込み、途中で見つけた草原で、小石を枕に寝転んで青空を見ながら握り飯をほお張る。

陶器で有名な笠間あたりから南下すると、岩間というところへ出る。
岩間といえば合気道をやっている人なら、一度は訪ねてみたい合気神社がある。ここは合気道開祖の植芝盛平翁が過した所で、かつて塩田剛三先生も修行しており、当時は斎藤守弘先生が意を継いで、多くの会員の指導にあたっていた。

私は合気神社の境内で身体に付着した埃を払い、神前で二礼、二拍手、一礼と威儀を正して行い、道路の反対側にある合気道道場を見学させて頂こうと道場の玄関に立った。
おりしも斎藤先生は杖の指導中であった。私は玄関先にまで溢れている生徒のひとりに見学の許しをお願いしていると、指導を止めた先生がやってきて「ご用はなんですか？」と問いただした。
「かねてから合気道を見たかったので、見学させてください」と丁重にお願いしたのだが、服装がジャンパーとジーパン姿だったので、どう見ても汚らしい。

「紹介状はお持ちですか？」「…と言いますと？」「ですから、どなたか合気道の先生か、警察署からの紹介状です」えーっ、そんなもの要るの？
「いいえ、何もありません」「では、ご遠慮ください。当道場は紹介状がないと初めての方にはお見せできません」言葉は普通だが語気は強かった。
この時、余程養神館の塩田館長のお名前を出そうかと思ったが、斎藤先生と塩田館長とが、その時点でどういう関係かが判らないので、ご迷惑になると思いとっさにまったく別人の名前を挙げた。
その人の名は土屋雅昭君と言って、大学卒業後は大手の印刷会社に就職し、更に独立して出版会社を創立した。
そして「合気道マガジン」という月刊誌を発行していたのだ。
「先生はレイ出版社の土屋雅昭君をご存知ですか？　紹介状はありませんが彼ならよく知っています」と食いさがってみた。「その土屋君ならよく知ってはいるが、あなたと土屋君が親しいかどうかは私には判らない」
この玄関先でのやりとりの間、百人以上のお弟子さんたちは、稽古を止め、シンとして成り行きを見ている。外国人が二割ぐらい混じっているようだ。
あまり長談判していると稽古の邪魔になると思い、結局私は断念した。

合気道小話「合気神社」

群馬杉武館代表　杉本　久

一度はあきらめたのだが、再度出掛けてくるのも面倒だ。
すぐ近くに農家らしい家があったので、庭先で農作業をしているおばさんに声をかけ、その家の電話を借りた。おばさんは遠くの方で「どうぞ〜」と言った。
「おぉ、土屋君か？　しばらくだね」「おや、杉本さん、お元気ですか？」「実はさ、今、岩間の斎藤先生の道場に行ってさ…」と事情を話した。
彼が会社を設立したとき、私は雑誌の内容や愛読者の確保で、それなりに協力支援したことがあった。
「だからさ、この電話終わったら、そっちから折り返し斎藤先生に電話いれて、この俺を見学できるように頼んでみてよ」「う〜ん、実は今、斎藤先生とはあることで、もめてるんですよ。タイミング悪いです。ごめんなさい」

ということで、その家の玄関を出て表札を見たら、そこが斎藤先生の家だった。
万策尽きて、再び合気神社に戻り一服していたら、やがて稽古が終わり、生徒たちがぞろぞろと道場から出てきた。
私はその中の青い目をした若い外国人を呼び止め、写真を撮りたいからカメラのシャッターを押せと身振りで伝えた。その若いやつは、ついさっき道場の玄関先で斎藤先生ともめてた人だと気がつき、しり込みをしている。
「ノー、プロブレム！」と一喝してボタンを押させた。